武蔵野日曜聖書講筵

パウロ羅馬へ
――使徒行伝第27～28章――

１９９１年12月15日
小池辰雄

歴史的な現実性　ローマへの旅　暴風にて難破　蛇に噛まれても害を受けず　イスラエルの懐く希望　大事な歴史的な立場

【使徒27】

1 既に我等をイタリヤに渡らしむることに決りたれば、パウロ及びその他数人の囚人を近衛隊の百卒長ユリアスと云う人に付せり。2 ここに我らアジヤの海辺なる各処に寄せゆくアドラミテオの船の出帆せんとするに乗りて出づ。テサロニケのマケドニヤ人アリスタルコも我らと共にありき。3 次の日シドンに著きたれば、ユリアス懇切にパウロを遇い、その友らの許にゆきて歓待を受くることを許せり。4 斯て此処より船出せしが、風の逆うによりてクプロの風下の方をはせ、5 キリキヤ及びパンフリヤの沖を過ぎてルキヤのミラに著く。6 彼処にてイタリヤにゆくアレキサンデリヤの船に遇いたれば、百卒長われらを之に乗らしむ。7 多くの日のあいだ、舟の進み遅く、辛うじてクニドに対える処に到りしが、風に阻られてサルモネの沖を過ぎ、クレテの風下の方をはせ、8 陸に沿いて辛うじて良き港という処につく。その近き処にラサヤの町あり。

9 船路久しきを経て、断食の期節も過ぎたれば、航海危きにより、パウロ人々に勧めて言う、10『人々よ、我この航海の害あり損多くして、ただ積荷と船とのみならず、我らの生命にも及ぶべきを認む』11 されど百卒長はパウロの言う所よりも船長と船主との言を重んじたり。12 且この港は冬を過ごすに不便なるより、多数の者も、なし得んにはピニクスに到り、彼処にて冬を過ごさんとて此処を船出するを可しとせり。ピニクスはクレテの港にて東北と東南とに向う。13 南風徐ろに吹きたれば、彼ら志望を得たりとして錨をあげ、クレテの岸辺に沿いて進みたり。14 幾程もなくユーラクロンという疾風その島より吹きおろし、15 之がために船は吹き流され、風に向かいて進むこと能わねば、舟を風の追うに任す。16 クラウダという小島の風下の方にいたり、辛うじて小艇を収め、17 これを船に引き上げてのち備綱にて船体を巻き縛り、

またスルテスの洲に乗りかけんことを恐れ、帆を下して流る。18いたく暴風に悩まされ、次の日、船の者ども積荷を投げすて、19三日めに手づから船具を棄てたり。20数日のあいだ日も星も見えず、暴風、烈しく吹き荒びて、我らの救わるべき望みついに絶え果てたり。21人々の食せぬこと久しくなりたる時、パウロその中に立ちて言う『人々よ、なんじら前に我が勧をきき、クレテより船出せずして、この害と損とを受けずあるべき筈なりき。22いま我なんじらに勧む、心安かれ、汝等のうち一人だに生命をうしなう者なし、ただ船を失わん。23わが属する所、わが事うる所の神のつかい、昨夜わが傍らに立ちて、24「パウロよ、懼るな、なんじ必ずカイザルの前に立たん、視よ、神は汝と同船する者をことごとく汝に賜えり」と云いたればなり。25この故に人々よ、心安かれ、我はその我に語り給いしごとく必ず成るべしと神を信ず。26而して我らは或島に推上げらるべし』

27斯て十四日めの夜に至りて、アドリヤの海を漂いゆきたるに、夜半ごろ水夫ら陸に近づきたりと思いて、28水を測りたれば、二十尋なるを知り、少しく進みてまた測りたれば、十五尋なるを知り、29岩に乗り上げんことを恐れて艫より錨を四つ投して夜明を待ちわぶ。30然るに水夫ら船より逃げ去らんと欲し、舳より錨を曳きゆくに言寄せて小艇を海に下したれば、31パウロ、百卒長と兵卒らとに言う『この者等もし船に留まらずば、汝ら救わるること能わず』32ここに兵卒ら小艇の綱を断ち切りて、その流れゆくに任す。33夜の明けんとする頃パウロ凡ての人に食せんことを勧めて言う『なんじら待ち待ちて、食事せぬこと今日にて十四日なり。34されば汝らに食せんことを勧む、これ汝らが救いのためなり、汝らの頭髪一筋だに首より落つる事なし』35斯く言いて後みずからパンを取り、一同の前にて神に謝し、擘きて食し始めたれば、36人々もみな心を安んじて食したり。37船に居る我らは凡て二百七十六人なりき。38人々食し飽きてのち穀物を海に投棄てて船を軽くせり。39夜明になりて、孰れの土地かは知らねど砂浜の入江を見出し、なし得べくば此処に船を寄せんと相議り、40錨を断ちて海に棄つるとともに舵纜をゆるめ、舳の帆を揚げて、風にまかせつつ砂浜さして進む。41然るに潮の流れあう所にいたりて船を浅瀬に乗り上げたれば、舳膠著きて動かず、艫は浪の激しきに破れたり。42兵卒らは囚人の泳ぎて逃去らんことを恐れ、これを殺さんと議りしに、43百卒長パウロを救わんと欲して、その議るところを阻み、泳ぎうる者に命じ、海に跳び入りて、まず上陸せしめ、44その他の者をば或は板あるいは船の砕片に乗らしむ。斯してみな上陸して救わるるを得たり。

【使徒28】

1われら救われて後、この島のマルタと称うるを知れり。2土人ら一方ならぬ情を我らに表し、降りしきる雨と寒気とのために火を焚きて我ら一同を待遇せり。3パウロ柴を束ねて火にくべたれば、熱によりて蝮いでて其の手につく。4蛇のその手に懸りたるを土人ら見て互いに言う『この人は必ず殺人者なるべし、海より救われしも、天道はその生くるを容さぬなり』5パウロ蛇を火のなかに振り落して何の害をも受けざりき。6人々は彼が腫れ出づるか、または忽ち倒れ死ぬるならんと候う。久しく窺いたれど、聊かも害を受けぬを見て、思いを変えて、此は神なりと言う。

7この処の辺に島司のもてる土地あり、島司の名はポプリオという。此の人われらを迎えて懇切に三日の間もてなせり。8ポプリオの父、熱と痢病とに罹りて臥し居たれば、パウロその許にいたり、祈り、かつ手を按きて医せり。9この事ありてより島の病める人々みな来りて医されたれば、10礼を厚くして我らを敬い、また船出の時には必要なる品々を贈りたり。

11三月の後、われらは此の島に冬籠せしデオスクリの号あるアレキサントリヤの舟にて出で、12シラクサにつきて三日とまり、13此処より繞りてレギオンにいたり、一日を過ぎて南風ふき起こりたれば、我ら二日めにポテオリに著き、14此処にて兄弟たちに逢い、その勧によりて七日のあいだ留まり、而して遂にロマに往く。15かしこの兄弟たち我らの事をききて、アピオポロ、およびトレスタベルネまで来り我らを迎う。パウロこれを見て神に感謝し、その心勇みたり。

16我らロマに入りて後、パウロは己を守る一人の兵卒とともに別に住むことを許さる。

17三日すぎてパウロ、ユダヤ人の重立たる者を呼び集む。その集りたる時これに言う『兄弟たちよ、我はわが民わが先祖たちの慣例に悖ることを一つも為さざりしに、エルサレムより囚人となりて、ロマ人の手に付されたり。18かれら我を審きて死に当たることなき故に、我を釈さんと思いしに、19ユダヤ人さからいたれば、余義なくカイザルに上訴せり。然れど我が国人を訴えんとせしにあらず。20この故に我なんじらに会い、かつ共に語らんことを願えり、我はイスラエルの懐く希望の為にこの鎖に繋がれたり』21かれら言う『我ら汝につきてユダヤより書を受けず、また兄弟たちの中より来りて汝の善からぬ事を告げたる者も、語りたる者もなし。22ただ我らは汝の思うところを聞かんと欲するなり。それは此の宗旨の到る処にて非難せらるるを知ればなり』

23ここに日を定めて多くの人、パウロの宿に来りたれば、パウロ朝より夕

まで神の国のことを説明して証をなし、かつモーセの律法と預言者の書とを引きてイエスのことを勧めたり。24パウロのいう言を或者は信じ、或者は信ぜず。25互いに相合わずして退かんとしたるに、パウロ一言を述べて言う『宜なるかな、聖霊は預言者イザヤによりて汝らの先祖たちに語り給えり。曰く26「汝等この民に往きて言え、なんじら聞きて聞けども悟らず、見て見れども認めず、27この民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉じたればなり。これ目にて見、耳にて聞き、心にて悟り、翻えりて我に医さるる事なからん為なり」28然れば汝ら知れ、神のこの救いは異邦人に遣されたり、彼らは之を聴くべし』

30パウロは満二年のあいだ、己が借り受けたる家に留まり、その許にきたる凡ての者を迎えて、更に臆せず、また妨げられずして神の国をのべ、主イエス・キリストの事を教えたり。（使徒行伝おわり）

●歴史的な現実性

パウロはかなり長くローマにいたんですが、そのローマで、獄中で書翰を書いた。来年は、パウロの獄中書翰、エペソ、ピリピ、コロサイ書に入っていこうと思っています。

日本が、何が危ないかというと、本当の事を顧みない。歴史を本当に認識することによって、はじめて現在を生きることができ、また未来をもたらすことができる。

「歴史をいい加減にしている」

ということが非常に間違っていることです。その点は、ドイツ人というのは、ごまかしをしないのが彼らの性格です。その点で、何といっても、ドイツはなぜ素晴らしいかというと、結局そういった、ごまかしのない性格ですね。これが、ドイツ人の素晴らしさなので、本当の――カントも言いましたが――「理性的な存在」（フェアヌンフティゲス　ヴェーゼン）である。そういうことで、全く、その点で日本は一番危ないです。

「真理」（ヴァールハイト）という言葉は、ヘタすると、観念的に響くので、私に言わせれば、「歴史的な現実性」（ゲシヒトリッヒェ　ヴィルクリッヒカイト）、本当の現実性ですね、「本当の事」。本当の事を認識する、それで初めて展開していく。そういった、平たい言葉でいうと、本当の「正直」なことです。

「正直に認識する」

こと。だから、日本の歴史は、文部省が政治的傾向性でやられたら、とんでもない話なんだ。グラッドストーンも、

「政治家が一番悪い」

と言っているわけで、庶民を非常に苦しめ大きな犠牲を払わしめているのは悪い政治家たちだ。軍部と一緒になってね。その点で、黙示録の終りの方でも、そういった権力者がい

かにやっつけられるかということが、こっぴどく預言されていますけれども、全くその通りです。

●ローマへの旅

それでは、使徒行伝の27章に入ります。

1既に我等をイタリヤに渡らしむることに決りたれば、

ということは、「カイザルに上訴する」とパウロが言ったものですから、

「本当は、上訴しなければパウロは助かったのに」

なんて、26節の終りの方に書いてあったでしょ。

「アグリッパ、フェストに言う『この人カイザルに上訴せざりしならば釈さるべかりしなり』」（使徒26・32）

と。これは、パウロが素晴らしいので、

「どこまでも本当の事を大ローマに行って言おう。また、ローマでも伝道しよう。いや、イスパニヤまでも行こう」

と思ったんだ。

「福音の為にはもとより生命を惜しまざるなり」

ということを実践したわけです。まぁ、大使徒ですね。ここにまた、「我ら」と言っている。「我ら記事」というのが、使徒行伝の中に4カ所ある。ルカが現実にそれを見聞きしているものですからね。それは、使徒行伝の16章10～17節、20章5～15節、21章1～17節、それから27章のここの所、これを「我ら記事」という。

パウロ及びその他数人の囚人を近衛隊の百卒長ユリアスと云う人に付せり。

カイザリヤから出発するんです。ローマへの旅のわけです。

2ここに我らアジヤの海辺なる各処に寄せゆくアドラミテオの船の出帆せんとするに乗りて出づ。

「アドラミテオ」というのは港です。

テサロニケのマケドニヤ人アリスタルコも我らと共にありき。

「アリスタルコ」は使徒行伝19章29節に出ている。

3次の日シドンに著きたれば、ユリアス懇切にパウロを遇い、その友らの許にゆきて歓待を受くることを許せり。

「ユリアス」は百卒長の名前です。とにかく、パウロはローマ市民だから、囚われの人であろうとも、懇切に扱う。ユリアスというのはパウロを尊敬していたようです。

4斯て此処より船出せしが、風の逆うによりてクプロの風下の方をはせ、5キリキヤ及びパンフリヤの沖を過ぎてルキヤのミラに著く。6彼処にてイタリヤにゆくアレキサンデリヤの船に遇いたれば、百卒長われらを之に乗らしむ。

この船は穀物をエジプトからローマへ運ぶ船なんです。船を乗り替えたんだ。

7 **多くの日のあいだ、舟の進み遅く、辛うじてクニドに対える処に到りしが、風に阻られてサルモネの沖を過ぎ、クレテの風下の方をはせ、8 陸に沿いて辛うじて良き港という処につく。その近き処にラサヤの町あり。**

9 **船路久しきを経て、断食の期節も過ぎたれば、航海危きにより、パウロ人々に勧めて言う、10『人々よ、我この航海の害あり損多くして、ただ積荷と船とのみならず、我らの生命にも及ぶべきを認む』**

もう、パウロはそういう事をちゃんと示されているんだ。大変なもんだ。たくさん積んでいるローマへの荷物も、いずれそのうちに嵐に合って、みんな棄ててしまう。これから地中海のまん中に出て行きますからね。

11 **されど百卒長はパウロの言う所よりも船長と船主との言を重んじたり。**

これは専門家だからね。ところが、専門家よりもパウロの方が先見があった。正直、大きな嵐にあう。

12 **且この港は冬を過ごすに不便なるより、多数の者も、なし得んにはピニクスに到り、彼処にて冬を過ごさんとて此処を船出するを可しとせり。**

ところが、これが間違えた。

●暴風にて難破

ピニクスはクレテの港にて東北と東南とに向かう。13 南風徐ろに吹きたれば、彼ら志望を得たりとして錨をあげ、クレテの岸辺に沿いて進みたり。14 幾程もなくユーラクロンという疾風その島より吹きおろし、

「ユーラクロン」という言葉は、ギリシャ語とラテン語のあいのこの言葉で、「北東の風」という意味だそうです。北の方からの山おろしの風なんです。

15 **之がために船は吹き流され、風に向かいて進むこと能わねば、舟を風の追うに任す。16 クラウダという小島の風下の方にいたり、辛うじて小艇を収め、17 これを船に引き上げてのち備綱にて船体を巻き縛り、またスルテスの洲に乗りかけんことを恐れ、帆を下して流る。18 いたく暴風に悩まされ、次の日、船の者ども積荷を投げすて、19 三日めに手づから船具を棄てたり。**

この辺から、ひっくり返ると危ないから転覆しては大変だ、というわけで、軽くするわけです。重いと、波に呑まれてしまうからね。

20 **数日のあいだ日も星も見えず、暴風、烈しく吹き荒びて、我らの救わるべき望みついに絶え果てたり。21 人々の食せぬこと久しくなりたる時、パウロその中に立ちて言う『人々よ、なんじら前に我が勧をきき、クレテより船出せずして、この害と損とを受けずあるべき筈なりき。22 いま我なんじらに勧む、**

心安かれ、汝等のうち一人だに生命をうしなう者なし、ただ船を失わん。
25この故に人々よ、心安かれ、我はその我に語り給いしごとく必ず成るべし
と神を信ず。26而して我らは或島に推上げらるべし』
「心配するな、どんな事になっても大丈夫だ」と。凄いね、パウロは。「船がなくなっても、生命は失わない」というんだからね。
23わが属する所、わが事うる所の神のつかい、昨夜わが傍らに立ちて、24「パ
ウロよ、懼るな、なんじ必ずカイザルの前に立たん、視よ、神は汝と同船す
る者をことごとく汝に賜えり」と云いたればなり。
「御使がこう言われたから大丈夫だよ」と。
25この故に人々よ、心安かれ、我はその我に語り給いしごとく必ず成るべし
と神を信ず。26而して我らは或島に推上げらるべし』
「島に押し上げられて難破するけれども大丈夫だ」と。
27斯て十四日めの夜に至りて、アドリヤの海を漂いゆきたるに、夜半ごろ
水夫ら陸に近づきたりと思いて、28水を測りたれば、二十尋なるを知り、少
しく進みてまた測りたれば、十五尋なるを知り、29岩に乗り上げんことを恐
れて艫より錨を四つ投して夜明を待ちわぶ。30然るに水夫ら船より逃去らん
と欲し、舳より錨を曳きゆくに言寄せて小艇を海に下したれば、31パウロ、
百卒長と兵卒らとに言う『この者等もし船に留まらずば、汝ら救わるること
能わず』
「冗談じゃないぞ、そんな事をすると溺れてしまうぞ」と。パウロに完全に信頼してないで、こんな事をするから。
32ここに兵卒ら小艇の綱を断切りて、その流れゆくに任す。33夜の明けんとす
る頃パウロ凡ての人に食せんことを勧めて言う『なんじら待ち待ちて、食事
せぬこと今日にて十四日なり。34されば汝らに食せんことを勧む、これ汝ら
が救いのためなり、汝らの頭髪一筋だに首より落つる事なし』
「もう危ないから食べろ」と。しっかりしているね、パウロという人は。
35斯く言いて後みずからパンを取り、一同の前にて神に謝し、擘きて食し始
めたれば、36人々もみな心を安んじて食したり。37船に居る我らは凡て
二百七十六人なりき。38人々食し飽きてのち穀物を海に投棄てて船を軽くせ
り。39夜明になりて、孰れの土地かは知らねど砂浜の入江を見出し、なし得
べくば此処に船を寄せんと相議り、40錨を断ちて海に棄つるとともに舵纜を
ゆるめ、舳の帆を揚げて、風にまかせつつ砂浜さして進む。41然るに潮の流
れあう所にいたりて船を浅瀬に乗り上げたれば、舳膠著きて動かず、艫は浪
の激しきに破れたり。42兵卒らは囚人の泳ぎて逃げ去らんことを恐れ、これ

を殺さんと議りしに、43百卒長パウロを救わんと欲して、その議るところを阻み、泳ぎうる者に命じ、海に跳び入りて、まず上陸せしめ、44その他の者をば或は板あるいは船の砕片に乗らしむ。斯してみな上陸して救わるるを得たり。

パウロが言った通り、全部救われてしまった。

●蛇に噛まれても害を受けず

28章です。

1われら救われて後、この島のマルタと称うるを知れり。2土人ら一方ならぬ情を我らに表し、降りしきる雨と寒気とのために火を焚きて我ら一同を待遇せり。3パウロ柴を束ねて火にくべたれば、熱によりて蝮いでて其の手につく。4蛇のその手に懸りたるを土人ら見て互いに言う『この人は必ず殺人者なるべし、海より救われしも、天道はその生くるを容さぬなり』5パウロ蛇を火のなかに振り落して何の害をも受けざりき。

「毒を飲めども死なず、蛇に噛まれても大丈夫だ」

と福音書の中に出ていましたね。

人々は彼が腫れ出づるか、または忽ち倒れ死ぬるならんと候う。6久しく窺いたれど、聊かも害を受けぬを見て、思いを変えて、此は神なりと言う。

「これは神の人だ、大変な人だ」と逆に今度は畏まってしまった。

7この処の辺に島司のもてる土地あり、島司の名はポプリオという。此の人われらを迎えて懇切に三日の間もてなせり。8ポプリオの父、熱と痢病とに罹りて臥し居たれば、パウロその許にいたり、祈り、かつ手を按きて医せり。9この事ありてより島の病める人々みな来りて医されたれば、10礼を厚くして我らを敬い、また船出の時には必要なる品々を贈りたり。

11三月の後、われらは此の島に冬籠せしデオスクリの号あるアレキサントリヤの舟にて出で、

「デオスクリ」というのは、例の有名な「カストル・ポルックス」という「双生児」（ゼウス神の双子の息子）です。ローマの象徴みたいなものだ。船にそういう徴をして、安全に航海するという、海の守り神みたいなものなんです。

12シラクサにつきて三日とまり、13此処より繞りてレギオンにいたり、一日を過ぎて南風ふき起こりたれば、我ら二日めにポテオリに著き、14此処にて兄弟たちに逢い、その勧によりて七日のあいだ留まり、而して遂にロマに往く。15かしこの兄弟たち我らの事をききて、アピオポロ、およびトレスタベルネまで来り我らを迎う。パウロこれを見て神に感謝し、その心勇みたり。

16 **我らロマに入りて後、パウロは己を守る一人の兵卒とともに別に住むことを許さる。**

やはり特別扱いだね、パウロはローマ市民だから。

●イスラエルの懐く希望

17 **三日すぎてパウロ、ユダヤ人の重立ちたる者を呼び集む。その集まりたる時これに言う『兄弟たちよ、我はわが民わが先祖たちの慣例に悖ることを一つも為さざりしに、エルサレムより囚人となりて、ロマ人の手に付されたり。18 かれら我を審きて死に当たることなき故に、我を釈さんと思いしに、19 ユダヤ人さからいたれば、余義なくカイザルに上訴せり。然れど我が国人を訴えんとせしにあらず。**

「あいかわらずユダヤ人が言っているから、仕方がないからカイザルに上訴した」と。パウロとしては、そういうわけだ。「国人を訴えるためではないんだ、自分の福音のためにやっていることが正しいから、それを言いたいだけだ」と。

20 **この故に我なんじらに会い、かつ共に語らんことを願えり、我はイスラエルの懐く希望の為にこの鎖に繋がれたり』**

この「イスラエルの懐く希望」という言い方が面白いでしょ。「イスラエルの懐く希望」というのは、メシヤを望んでいるわけです。ユダヤ人は、キリストはメシヤとは思わないからね。ところが、

「イスラエルの希望はキリストで、希望はちゃんと来たんだ。それを彼らは受けとらない」

と。今のユダヤ人も同じことだ。相変わらず望んでいるんだよ、メシヤを。ところが、望みの実体はイエス・キリストだから、そのためにパウロがどこまでも戦っている。これは本当の現実なんだからね。主観でも何でもない。

21 **かれら言う『我ら汝につきてユダヤより書を受けず、また兄弟たちの中より来りて汝の善からぬ事を告げたる者も、語りたる者もなし。22 ただ我らは汝の思うところを聞かんと欲するなり。それは此の宗旨の到る処にて非難せらるるを知ればなり』**

ちゃんと、君から直接に聞きたいわけなんだ、と。

23 **ここに日を定めて多くの人、パウロの宿に来りたれば、パウロ朝より夕まで神の国のことを説明して証をなし、かつモーセの律法と預言者の書とを引きてイエスのことを勧めたり。**

イエスは、全部、預言の実体なんだということを証したわけだ。

24 **パウロのいう言を或者は信じ、或者は信ぜず。25 互いに相合わずして退かん**

としたるに、パウロ一言(ひとこと)を述べて言う『宜(うべ)なるかな、聖霊は預言者イザヤによりて汝らの先祖たちに語り給えり。

「もうイザヤが言うとおりだ、お前たちがそんな事を言うのは」と。

曰く　26「汝等この民に往きて言え、なんじら聞きて聞けども悟らず、

だから、「私の言う事を聞いても、さっぱり悟らない。そのことは、もう預言者イザヤが言っているんだ」と。

見て見れども認めず、この民の心は鈍く、耳は聞くに懶(ものう)く、目は閉じたればなり。

「それでも、語れ。彼らがいかに頑迷であるかということが分かるために語れ」というようなわけだ。困ったもんだ。

これ目にて見、耳にて聞き、心にて悟り、翻えりて我に医(いや)さるる事なからん為なり」

「医(いや)さるる事なからん為なり」とある。「医(いや)さるる事あらん為」でなくて、「なからん為」なんだ。

「いかに真理に逆らうご連中か」

ということ。凄いね。とにかく、旧約と新約で、旧約の預言者イザヤと新約のパウロは本当に魂が相応えるような人物です。

●大事な歴史的な立場

イザヤ書は――預言者というか、むしろ預言書イザヤ、イザヤ書全部です――三人の人が多分書いているわけですから。第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤと。それが渾然としているわけです。大変なものです。とにかく、イザヤ書というのは凄い。よく読んでくださいよ。今の政治家はイザヤ書を読まなくてはダメなんです、本当は。内村先生は、

「本当の愛国は預言者の言による。救いは新約聖書によったが、自分は、愛国が何であるかは預言書によった」

と。預言者の愛国というのは、剣でもって守る事が愛国でも何でもない。

日本人は、本当は、大事な歴史的な立場にあるのに、本当にその点で、逆に日本ほど情けない国はないんだよ。だからそれを、我々は悟らしめられたのは、敢然としてあなた方もやっていただきたい。みんな使命がある、男でも女でも。

28然れば汝ら知れ、神のこの救いは異邦人に遣されたり、彼らは之を聴くべし』

30パウロは満二年のあいだ、己が借り受けたる家に留まり、その許にきたる凡ての者を迎えて、更に臆せず、また妨げられずして神の国をのべ、主イエス・キリストの事を教えたり。（使徒行伝おわり）

これでおしまいになっている。その先の事は書いてない。

とにかく、軟禁状態の獄中で書いたのが、エペソ、ピリピ、コロサイ書で、来年はこの獄中書翰をいたします。

日本の明治の前の先駆者である、同志社大学を建てていた新島襄と、それから、どん底の人たちを相手にして福音を伝えた賀川豊彦、この二人は、私は無教会の先生方よりは今は尊敬しています。

言うまでもなく、キリストの大反対者であったパウロが大使徒となった。我々は、今、パウロの、正に嵐の中をつき進んで船が難破しても、これを救ってしまったような、そういった御霊の力でもって乗り切ったところのパウロの事実を、私たちは全部読みながら、承った。私が何も付け加えることはない。

だから、信仰はまさに

「信交」

キリストの中に先ず信じ交わる。一如の世界に入ったら、その先は正に

「信行」

「信仰と行為」ではないんだ、この「信行」という言い方は。信即行。全部、「即」の世界です。信じてから行為に現すのではなくて、信ずることが同時に行為なんです。信ずることが全身的な行為なんだから、それが外的な行為に当然展開せざるを得ない。

「信ずるは易く、行うは難し」

と、そういう言い方はいかん。

「どんなに、行為が跛行的な情けない行為であっても、これは一つである」

ということ。そういう捉え方が福音の世界なんです。

「御意を行う者のみ救われる」

と、キリストの言葉にそういう言葉もある。

「主よ、主よ、とただ言っていたってダメなんだ」

と。我々は、「精神と肉体」というけれども、精神と肉体が離れていますか。我々のどこが精神で、どこが肉体かは、離すことができない。霊体一如の世界です。全部、一如の世界、分裂のない世界。救いというのは、魂も肉体も全部救われることが、キリスト教の、福音の救いなんだからね。「永遠の生命」とはそういうことだ。

「不滅の生命」

ということですよ。時間的に永遠だとか考えることはない。滅せざるところの生命です。

日本は、神なき民主主義ではダメなんだ。ゲーテというのは、とにかくそういう意味で、凄いです。

「神・大自然・我」

というのが融合しているような人格ですからね。だから、でっかいんですよ。その点で、どうしても日本人は目覚めなければダメなんだ。